

8 January 1973

曇。12°F。8時起床。C宛への手紙を出しに行こうか行くまいかと考える。
外出する口実を探す。図書館へ行くには寒すぎるようだ。R夫人のものの言い
方が
神経にさわる。無理をして気嫌よく見せかけているつもりなのでその気持ちの
上の
[Illegible]が声音となって現れているから。咎めと[Illegible]。
Cの姉(妹?)宛の手紙を書く心算。それから日本宛へも[Illegible]。
白紙は書かなかった。二時間ほど昼寝をして、夜、買物に出かける。部屋着一
枚。
セーター、ブラウス、白袋、各一。
夜はテレビを観て過ごす。
[Illegible]に[Illegible]る。

Jan 9th

JPN

晴。空気冷たく乾燥。爽快。
午後十時～十二時。図書館まで歩く。人間二人に出会う。二人とも声を掛けて
くれ
た。本二冊に目を通す。A.陶器の本と B.イスラエルの[Illegible]に関する本
A.技術的不足を補うために[Illegible]そのものの価値を強調している。
B.観[Illegible]がいくらか時代遅れ気味。
図書館通いをしようと思論む。徒歩15分かかる。
Cの姉宛への手紙を書き終える。タイプで仕上げて封印。静寂。柔らかな水の
感触
。
起床6時。早くから目が冴える。
使命感のようなものを感じず。何かがあるに相違ない。
宿命(嫌な日本語)かもしれない。

Jan 21st

JPN

3日相方にクレイグから電話があった。
何かを始めねばならない。[Illegible] [illegible]
[Illegible]の[Illegible]い感傷的な焦燥感。

昨夜は眠れなかった。朝7時近くまで床の中でじっとしている。
予感というものの確率。化学と非科学との間隔。
科学を[Illegible]する精神状態がナイーヴな[Illegible]になっている現在。
私の周囲の空気は空気は一体何によって構成されているのか。シューベルトよ。
本でも読めばよいのかもしれない。
クレイグにでも会って話をすればよいのかもしれない。
だが、クレイグのズボンの中の茨(とげ)が苛立った。
キルケゴールのような[Illegible]を作り上げるだけだったとしたら。
手紙を書いた方がよい。私の中で方向が見失われたような気分になっているの
だが
、だが問題はただそれだけのことなのだろうか。他を欺く時の容易さのために
10
分をその中で溺死させるというのはつまらぬことだ。素晴らしい精神にめぐり
会い
たい。何か、途轍のないものを見たい。凄い感覚に触れてみたい。私の空気よ！

Jan 26th

JPN

クレイグから電話があり、午後から会いに出かける。濃紺のジャケットにスコ
ッチ
柄の首巻をしていた。私のことを天才だと思[Illegible]たために、懸命
に"[Illegible]"
に就いて話をする。私は又、狂気であるということの"安息"を[Illegible]こうと
努め
る。彼の中の何者かがしきりと私という存在を彼と同次元のものにとどめよう
とし
て居り、私は私でそうあることの不可能さを説明する走力を無くして、只無邪
気な
子供でしかないような偽りを装って空気の中に消えて行く話を聞く。
自分のことに夢中になっている時の傲慢な彼のほうがよい。硝子のように宝は
脆い
殻の中に閉じこもって懸命に自分を守ろうとしている彼のほうがよい。殻の中
から
出てきて、私などを[Illegible]もうとすると、彼は普通の人間になってしまう。
遠い
[Illegible]の中から、無垢のままの眼をじっとみはり[Illegible]、それでも眼前に

ある

ものを見ることを拒否している時の彼の方がよい。話人であった方がよい。晴。比較的暖かい。

Jan 27th

JPN

ヴェトナム”戦役”が形式上、終季を見た。

キッシンジャー博士は下手な職人が造ったロボットのような格好をしている。

あの

ように無表情で無感覚で冷淡そのもののような人間像が”魅力的”に見えたりする世

代とは何のようなものなのか。硬直[Illegible]を意識的に指向している世代とは、冷

酷な独裁と統正の足音を聞いたならそれを受け身で受け身で待ち受けている。凍結し

てマヒした集団の心理状態だ。若しも、苛酷極まる世紀の大悪党が現れて、その機

械的な冷酷さと[Illegible]さを着に取って大衆に向かったとしたならば、或いは単に

その存在が不可抗的に魅力的だからという理由だけのために大衆は熱狂して行くに

相違ない。原始的な呪祈術に似ている。機会が何であるのか[Illegible]えぬ者にとっ

てもそれが冷ややかで[Illegible]で、物に動じぬということ[Illegible]は納得できる。

人間をそれより優位に考えたりするのは”教養のない”(何というマジック!)証拠なの

である。

Jan 28th

JPN

小野寺嬢の引越しを手伝いに、ニュージャージーまで出かけ、彼女のアパートへ行

き、”居酒屋”で食事をする。百七十五ドルで入[Illegible]することのできた独立と領

土は中味は何とあろうと[Illegible]しむに値する。

雨が降り、寒かった。

一箇所しかない洗面所が、台所を兼ねていることや、クロゼットの中にシャワーが
付いていたこと等をここに記入しておくとは後日の役に立つものだろうか。

Jan 29th

JPN

リザ・ガーバーから [Illegible] が来る。私がひどい精神的窮状に陥っているというこ
とを直感して、書いて等したような文面。起きよって [Illegible] へ出かけて、他人を
愛するということが立派なことだというのは面白い。
午前中、吹雪があった。午後は快晴。
マーリーナ嬢に電話をして水曜の夕方会うことにする。とんだ役目を引き受けたも
のだ。
里猫はびんびん [Illegible] を増し、猫らしくなって来る。

Jan 30th

JPN

午後五時近く、エムパイアービルの下でマーリーナに会う。居酒屋へ行き話をす
る。
イスラエル生れ。七年前に来米。5 フィート3~4 インチ。美人型。
神経質。魚座(3月5日)生れ。

マツキサミズの日記 1973年4月3日

この日記の翻訳の中で、サミズは作品「祝賀者」の計画、デッサンと絵画について説明しています。同時に、サルマガンディクラブ（ニューヨークの Salmagundi Club）で紹介されたことも語っています。

記述: サミズとライカー夫人、とその他二人の写っている写真、1973年3月15日以下エントリー

February 1973年2月1日木曜日

まるで交差点に立っているような気がする。ちょっとした幻想的なトリックで、通常の自分と別人格の魅力的な女性を実際に創り出せることを発見してから、1度に二人の人間と歩き回っている。ついに、とうと

うこの2倍の人生が2倍幅のある人生となっていく。中年女性とアーティストという二つのアイデンティティーが自然に並んで歩いていけると考えると、ミステリアスな興奮が湧いてくる。

絵画のデザインやアイデアが形になり始める。稀な物質は、人間にある程度の不安をもたらすものだ。この空っぽな重要性は実行と言う労力に値するものだろうか。

正直に言って、重要な思考や中身のあるアイデアや、注目されるようなスピリチュアルな状態などを見つけることは殆ど無い。

このような時は「過去」について考えるのにピッタリである。もしかすると、書き始めてみるのが良いのかもしれない。

1973年2月2日金曜日 全ての音、全ての重要性と不要性が邪魔だ。この様な孤独が必要な条件であるなら、完全に孤立する方が良いかもしれない。絶えず地下室に移動することを望んでいた。歳をとって毎日の作業が面倒になり、そのせいで主に自己認定の衝動に基づき礼儀正しく振舞うことが厄介になり、このひどく退屈で犠牲とを感じる辛抱状態にとっての慰めも見つから無い。残りの一生(*1)を自分の思い通りに生きていきたい。

「絵画」を描くことは現在の私に残された一つの儀式行為である。私の存在を正当化してくれるたった一つの儀式行為である。そうでなければ、日本の家族に毎月30ドルの送金をしないで、この家でただで食事を与えてもらっているだろう。そして何よりも、素晴らしいスピリットと出会うためにニューヨーク市内を歩き回る、全ての口実を無くしてしまう。

(*1)私は6年間「試験生活」が何とかして終わることを待った。

残念！驚いたことに、私の「静物画」に彼らは格別な独創的な興味を示した。おそらく結局のところ、文明の様々な進歩にも関わらず、「魔法」の力は実際には変わらないものなのかもしれない。

ブラウン氏は、透明な現実の代理創作し続ける、小柄の白人の男性である。前近代美術を理想的に語り、その情熱を意識的に強調する人物で関係を保っている。彼の奥様は、美術愛好家の中では最も人気のある、大抵子供の様な素朴さ、無関心で手に届き易いタイプキャストを選んだ。彼女はうまくプレイしていた。彼らの娘は鋭い感受性と、まだ型に嵌っていないタイプのプレイで最も魅力的に見えた。夕食は鶏肉のバーベキューだった。

1973年2月3日土曜日 ブラウンさんのお宅を訪問する。私が彼に売った3点「アヘン!」、「静物画」と「バーバラと占い師」があった。「アヘン!」を再度徹底的に点検する時間がなかったことが残念だ。テーブルの私の席の真正面に「アヘン!」を掛けてくれた特別な配慮にも関わらず、他人への軽薄な観念のためかあまり見るができなかった。（おそらくナルシストな印象を与えたくなかったのでは?）

実は、自分自身の作品を見ること以上に楽しいことはない。

1973年2月4日日曜日 朝の11時ごろに目が覚めた。クレイグから電話があった。彼は待っていた。中山氏の下で働くクレイグは、ニューヨーク周辺で陶器の展示会を設定していた。午後に彼より3歳年上のお姉さんに会いに行った。クレイグとは全然似ていない。彼女のボーイフレンドは面白そうな人だった。陶器にかなり興味を示していた。本屋のオーナーである。

クレイグは頭が良く現実的だ。鋭い感受性（従って最も壊れやすい）を巨大な筋肉と、ある程度の内気な性格の裏に隠している。たまに恐る恐る隠れ場のドアを少しだけ開き、やや困った様な小さな笑顔を浮かべる。

3人とも皆乱読家で、彼らの話の内容の3分の2はわからない。アンドリューワイエスについての本があり、いつもの様に彼の作品のチャーミングな性質に非常に艦名を感じた。

それらは、口先が良く賢い批評家達の些細な次元から程遠い、心地よい川と鳥の音を思い出させてくれる。 — 丁寧な発言が静かな永続性と共に独占し、私達の感覚を喜びで楽しませ続けてくれる。

私の性格とは違うが、誰からも見下す様な表情で見られなければ、きっと彼の作品をいくつか所有したい。だが残念なことに、多かれ少なかれ、私はワイエスよりも「上」にいるふりをして、傲慢さを呼び起こそうとするあの集団の一人である。これはワイエスがまだ20世紀を代表とする偉大なるアーティストとして道められる以前の事だ。

クレイグは赤いシャツを着ていた。

1973年2月5日 1日中寝た。クレイグに2回電話したけれど留守だった。

理由が有ろうと無かろうと、私に電話して欲しい時は彼はとてもオープンで、真剣にさえ見えた。夜の7時ごろにまた電話してみた。今回は電話に出た。お互いにあまり話すことがなかった様だ。マリナのことを少し話した後、まるで何かの企業会議の様にお互いに電話を切った。

私の隣に座っている時に彼が言ったことを考えた。彼が私と結婚しない理由は、もし彼のことが大嫌いでも私が7年間何も言わないことが心配だからということだ。

彼に言われたことを考えると、違和感を拒否できなかった。クレイグが私と結婚することを考えていたと思うと変な気分がした。私はクレイグとカズ子の結婚について質問しようと思っていた。カズ子はクレイグと一緒にワールドエンタープライズで働く会計士だ。瞬間的に表現した、4ページ

彼の感情の変化がどの様にして起きたのか分からないが、何にせよ、気分が良くなった。時々彼の言葉と行動が理解しきれない！何という偽善だ！まるでクレイグと私との間にある、何かを頑固に拒否しているかの様だ。何故？

1973年2月6日

朝10時。クレイグに電話した。「彼」は電話に出たが、いとこのスコッティに声がそっくりで、クレイグだとは思えなかった。彼は午後誰かに会う予定で、「何が起きるか分からない」と言ったが、その話し方が彼らしくなかった。多分眠かったのかもしれない。

シティに行った。アジアハウスで日本陶器の展示会を見回った。縄文土器は物凄い魅力に溢れている。縄文は日本では一番古い陶器だ（旧石器時代）。そのオーガニックな形で有名だ。ほとんどは写真でしか見たことがないが、長いことこの陶器が好きだ。中期の生産を見るのも面白かった — 桃山陶器、やはり明らかにオーガニックなスタイルである。桃山は日本のルネサンス時代にあたり、禅の影響を表している。

縄文土器の生産者がアイヌ族という事実も興味深い。弥生（新石器時代のもうひとつの陶器で、通常縄文とペアになっている）はモンゴル人による生産で、幾何学文様の行列が記されている。

考えて見る価値はある。それぞれのスタイル表現は多かれ少なかれ生活から影響を得ている。（狩猟採集民対農民）民族性というよりも。

「女性は女性を選ぶ」というタイトルの展示会があった。

4ページ

その代わりに日本のデパート、高島屋へ行くハメになった。誕生日のプレゼントを買って急いで家に帰った。疲れた。

1973年2月7日水曜日 午後3時までベッドに横たわった。 シティに行く予定だったがかなりの努力の様に感じた。

デビッドメスから電話があった。面接でワールドエンタープライズに来た時に会ったことがある。（彼は雇われなかった。）韓国から孤児達を連れて帰って来た。韓国を助けるために、孤児をアメリカにて連れてくる国際計画があった。デビッドはその頃平和部隊に雇われていた。アメリカに30日間滞在する予定をしていた。

デビッドメス (1)は私のことを皆に話した。私の方向音痴のせいで、日本のデパートで出口を探すために二人で隅々歩き回った出来事をいつも面白がっていた。

残念なことに、私はもはや彼が抽象する「活気と基地に満ちた」人間ではない。今では豚の様に馬鹿でだらしのない人間でしかない。皆に聞かれる、「絵を描いてる？」答えはひたすら「いいえ」だ。今週中に彼に会う計画を立てた。クレイグの名前が出るたびに、デビッドの声の元気が無くなる。

クレイグに電話した。スコッティが出て、昨日外出して今晚も帰らないけれど、帰ったら電話させる、と言われた。

夜10時。電話は無い。ペン駅はストに入る、ということはクレイグをまりなに紹介できない。日本の実家から小包が届いた。ジョンベリーから葉書が届く。

付記:

(1) 私の方向音痴のせいで、日本のデパートで出口を探すために二人で隅々歩き回った出来事をいつも面白がっていた。 凍った雨。

(2)日本のデパート、高島屋。

(3) 面接でワールドエンタープライズに来た時に会ったことがある。(サミズはその事務局長だった) 彼は雇われなかった。

(4) デビットメスはその頃平和部隊に雇われていた。韓国の孤児を助けアメリカに連れてくる国際計画があった。

5ページ

1973年2月8日木曜日 曇り後雨。ペン駅がスト入りしてから ロングアイランド鉄道でウッドサイドに行ってから地下鉄を取らなければいけなし。6番街で降りて、5番バスに乗り72番通りで降りてから、約5ブロック歩いて76番通りの305番地にあるカズ子のアパートに辿り着いた。地下にあるアパート2号室が彼女の家だった。彼女は昼寝をしていた。夕方まで噂話をしてからクレイグに電話をかけた。私達に会いたがったが外出するかどうか迷っていた。雨の中、近所のスーパーで夕飯の食材を買った。

夕食後9時ごろカズ子の部屋のハス前に住む桜内という日本人男性を訪ねた。クレイグからは音沙汰無し。

ビールとシャブリを飲みながら、明け方3時まで話し込んだ。きちんとして丁寧な日本人紳士が、禁断の果実を味わったようだった。次の祭日に一緒にナイアガラの滝を観に行こうと誘った。頭が良く、会話上手だが、基本的にいつもロマンチックな一がっかりする脱線タイプである。彼のような人には天使のような売春婦が必要だ。

クレイグのことばかり考えている。

1973年2月9日金曜日 カズ子の家で午後2時まで寝た。昨日は中々寝付けなかった。足が邪魔だった。ベッドの中で1時間ほど話してから軽く昼食を済ませた。

桜内のカズ子に対する興味はどこことなく秘める感じがする、とカズ子は思っているようだった。ドアの下に彼からのメモを見つけた時に、拾い上げて日時を書いてプライベートの箱にそっと入れた。彼女の自由さが羨ましく感じた。独占欲が強い男性達に囲まれている私の方がどちらかといえば奇妙だ。

ペン駅のストが今晚で終わった。ラッシュアワーの間に家に戻った。巨大なロボスターがテーブルの上に置いてあった。今日はドニーの誕生日だ。私のプレゼントを気に入ったと言って、飲み過ぎてベッドへ入った。格好は良い子だが全くつまらない。

当然として、少し真面目すぎる態度を見せる彼を面倒だと感じる。例えば今晚のように、10時にデビッドに電話したが留守だった。とても感じの良い女性の声が出た。私の名前（サミ）に聞き覚えがあるようだった。クレイグのことを考えながら少し淋しく感じた。

1973年2月10日土曜日 リサジャービスとジョンベリー、シーラとナットに手紙を出した。夕方5時まで浅く寝た。クレイグのことを考えていた。それでも自分をその方向へかなり意識してプッシュすれば、真実からは遠くない。

朝11時。デビッドメスからシティに行くと言った。月曜日の午後2時に会う予定だった。6時にカズ子に電話をして計画を伝えた。クレイグに電話しようと思ったが、周りで耳立てしてる人たちのいる所で目的のない会話の交換はをすることはどことなく不快な気分がした。とにかく（ウエストエンドにある！）家に静かに帰るはずは無いだろう。恐らく、彼のことは忘れて本当に絵画を書き始めるべきかもしれない。

今日はとても寒い。ドニーは

次のページへ

二日酔いでまだ寝ている。彼の胃が気にさわる。時々豚のように見える。脂肪の塊が肉感的な直感の髪で覆われている？非常に退屈だ。

1973年2月11日日曜日 朝の5時まで夜更かしした（まだとても暗かった）。殆どの間机の前に座り、「脳」という本のイラストを見て自分の脳について考えた。文字通りヘッドトリップを楽しんだ。ドニーと少し話してから寝た。

起きたのは午後5時以降だった。私の心拍数は1分あたりわずか45（ベッドの中で測った）だった。もし死亡したら、移植のために心臓を寄付するつもりだ。

ニュース放送：ニュージャージー側のステタン島で原油タンカーが爆発した。死亡者数42人。天気が悪いため北ベトナムのアメリカ人の人質（数百人）に運送（アメリカに変えるための）が延期となった。

ジョンポールサルトルのガールフレンドのシモーヌドゥボーヴォワールの本を読んだ。彼女はフランスで有名なフェミニストだ。共感するスペースは見つからなかった。自分自身の若さを上回る、並外れた好奇心に捕らわれた。私は確実に若く見えると思う。魔力の追求 - この情熱的な若さの追求には何も勝てない！

絵を描き始めなくてはいけない。

中山さんに手紙を書かないといけない。

一体クレイグは何をしているのだろう？夕方4時。寒い。

1973年2月12日月曜日 午後3時10分に居酒屋、和食レストランに到着した。デビッドメスは
新しいページ

4時ごろ着いた。私たちは寿司カウンターに座り、マキという名のウエイターと話をした。デビッドは髭を生やし始めた。茶色のバックグラウンドに黄色いチェックのジャンパーを着て、生き生きとして見えた。マネージャーが従業員に選ぶ、一般的なややくすんだかすり模様の着物を着たカズ子が4時45分ごろやって着た。かすりは青い生地折り込みをしたもので、労働者階級を表す。

彼女は4、5分間ビザの問題の話をした。そこから、私達、デビッドと私、は一緒に洋服屋、「アウトルック」へ行き、ジャネット（ハロルドのガールフレンド）に出会い、ジャネットと一緒に「地下室」 - 彼らの住処へ行った。天井と壁全面を白く塗るのは良いアイデアだと思った。電気を節約できる。

ハロルドの色鉛筆の作品は、まるでてんかん患者が叫んでいるか金切り声を出しているかの様だ。表現のスキルが欠けているのはかなり明白だ。その時点で、もしもハロルドが並外れた「美しい」若い青年だと知っていたら、彼の自家像の表面に一種の自己宣言の様な自己妄想の強い意図を見抜いただろう。ファンゴッホの自家像（最後の）が壁にかかっていた。「鬱病のメカニズム」という本が本箱にあった。美しい

猫、生後5ヶ月、がそこにいた。

その後、ビレッジで人気のあるマックスのカンザスシティレストランへ行った。2階はダンスホールだった。フランクステーキを注文した。巨大なサラダボールにはレタスの山があった。（マックスのKCは大きいアイスバーグレタスボールで有名だった。）

ここは芸術家の集まるスポットだと言われていた。金持ちそうなビジネスマンのグループが私をジロジロ見ていた。ターバンを巻いた黒人もいた。

1973年2月13日火曜日 マジソンアベニューの「アウトルック」でデビッドメスに会った。3人以上周りに人がいると、デビッドは冗談ばかり言うタイプなのだと思う。イタリア人系のジャネットは今日厚化粧をしている。彼女はアンディウォールタイプの体の大きな子だ。彼女の唇は時々2匹のミミズの様に見える。

それからハロルドが働く「アウトルック」洋服店へ3人で向かった。彼は大変な美少年だった！この様な「美しい」少年（19歳）が主に巨大な女性像を追求しているとは想像がつかない。単に現在のファッションナブルな手段を追っているだけなのか、グロテスクで憂鬱な想像を通して自分自身をさらに魅力的に見せる手段を直感的に見つけたのだろうか。おそらく、並外れた美が魂の叫ぶ逃げ道を探すのは自然な結果なのだろう。

醜さという良いコンテキストは（デビッドの場合）、非常に重い心臓、頭と魂に潰されているかの様に見える、その中でただ一つできることは馬鹿の様に笑い、ロマンチックな詩を一つずつ吐き出すことだ。

デビッドのお母さんを訪ねたて、ピザをご馳走になった。

次のページへ

マリンに電話をかけた。一家中で家まで送ってくれた。

次のページ

1973年2月14日水曜日 クレイグは既にコロラドへ発った。電話をするとスコッティが出た。私に説明するのが大変そうに聞こえた。私：「そのうち会おう。」スコッティ：「そう期待するよ。」

誰かにクレイグに対する本当の気持ちを告白する可能性について考え

た。マリんに電話をかけることを考える。

午後の4時まで寝た。良く眠れなかった。2~3 時間後に目が覚めて、その後ベッドの中で2~3 時間寝返りを打った。そして1~2 時間寝てからまたその後1~2 時間寝返りを打った。

3日間ほどかなり忙しく過ごしたので、ある程度の怠けは正当化できるだろう。マリファナを少し吸った上に睡眠薬も飲んだ。今晚こそ良く眠らなければいけない。

地下で絵を描くために準備をした。

カズ子に電話をする。「居酒屋」のボスとはまだ話していないと言っていた。何故その様に躊躇っているのだろう - 多分「皆に良い顔」（日本語の表現で問題を起こさないという意味）をしたいのだろう。

1973年2月15日木曜日

決心した事：好きでない絵は描かない。もしこのせいで干ばつになったら、飢え死にする方がマシだ。

地下は寒い。祝賀者の「下塗り」を塗った。

自画像は素晴らしい目玉だ。

眠りのスケジュールはまたもや狂ってしまった。

次のページ

グッゲンハイム美術館ではフェルディナントホドラーの特集をしている。

月は出ている？

1973年2月16日金曜日

朝6時10分前。奇妙に動揺している（神経質）

気温は0度以下に下がった。

凍った雪（雪の氷？）

「祝賀者」設計インフラが形になりだした。

ロックウェルと対比されることを避けるために、できるだけ最大なキャンバスを使わなければいけない。私自身の状況に限って言うと、現在の

状況は実に（ロッキウエルと）同じ次元にある。したがって、日常の状況に反映する方法の適応は「適切」である以外何も無い。

「適切」とは奇妙な表現である。まるで観客がいることを期待しているかのようだ。

時々、いっそ気が狂ってしまったらどんなに楽だろうと思う。雪が降り続ける夜は、この様に狂気に引き寄せられる様に感じる。雪が魚の様に見える。

本当に絵画に全力を尽くさなければいけない。ただ絵を描き続ける。それだけだ。

色々な形が私の目の周りを飛び回る。まるで小鷺達の様に。
あぁクレイグ、どうか元気でいて！

1973年2月17日土曜日 今日寒い。「ステーキパブ」で夕食をした。
牛ヒレ肉とロブスターは一人当たり7ドル。

レタスは4分の1の大きさ。ブルーチーズソースが美味しかった。後ろに座っている女性は同席の男性の批評ばかりしている。彼女に関することばかり。腹に詰め物の無いロブスターは、高級クラスの彼女の好みにぴったりだ。

そしてサンフランシスコでは、一人当たり200ドルで1コースが食べられる。そこで（好奇心から）後ろを振り返る（彼女を見るために）と、安物のセーターの胸元を開けて、干からびたバナナの様な胸を見せた、あまり魅力のない雄鶏の幻の様な中年女性が座っていた。

安い100円ショップで、安物の宝石や赤ん坊のオムツを売っていたらぴったりする様な女性だ。それでも、彼女は極度な真剣さで高級料理の料理方法について叫び続けた。この様な安いレストランでこの様に振る舞うとは気の毒の様な感じがして、日本の銭湯を思い出した。

喉が腫れて痛い。お腹もだ。風邪薬を何錠か飲みベッドに入った（朝2時）。夕方の5時から6時に起きた様だ、何故レストランは赤を穿いたがるのか？

1973年2月20日 2日間眠り続けた。このおかげで、はっきりとした目覚めを迎えられた。睡眠不足でとても眠かった。しかし、風邪の引き始めの様な気分だ。左目が痛い。オイスターベイにあるミカワと言う名の和食レストランへ行き、すき焼きと天ぷらを食べた。カズ子がそこで働くことについて、ウエイトレスに相談した。ウエイトレスは喋りすぎだ。

もう一人の「スミ」という京都弁のウエイトレスの方が好ましい。夜10時半頃家に戻りカズ子に電話をかけた。

シュルレアリスム哲学のコレクションから本を1冊読んだ。フランスのグループのエルンストマックスの本、「博物学」についての紹介エッセイは面白かった。ジャコメッティは正直な人だ。アンドレベトン（ブルトン？）は気難しい。ダリのボキャブラリーは私には自惚れ過ぎでついて行けない（楽しみながら描くために、頻繁に辞書が必要だった）。それなので、後日のためにとっておく。考えるのが面倒すぎる。イタリアのキリコの手紙の中に多くの疑わしい点がある。

ボキャブラリーが沢山あることは便利だ。吐き気がする。朝の2時まであと10分。

1973年2月21日 カズ子の東京時代の20歳の友達、ミノルが訪ねに来た。彼らは「ヴィスタ」というコーヒーショップで一緒に働いている。日本から3日前に着いたようだ。

ここで一番印象的なことは何か？と聞いた。答えは、「スカイスクレーパーと始終英語ばかり聞こえること」だ。現代美術館で働く有名人、ドナルドリッチと暮らしている。

カズ子は仕事のために早く帰っていったが、ミノルは、このライカー家で一晩止まっていった。

近所のディスコに踊りにいった。風邪が長引いているためあまり気分が良くないので、ドニーとミノルとそれぞれ2回だけ踊った。ミノルはとても日本人らしく、ゴーゴーという踊りのステップを勤勉に学んでいた。その後、その付近のイタリア料理のレストランへ行きピザを食べた。大きなシェパードがいた。

ミノルはアメリカ人の女の子たちの醜さについて文句を言った。アンディデラニーから、アメリカアーティスト連合の通知と「料金の支払いは済んだ。それからもう一つ、正気なばかり苦しんできた経験を私〔アンディ〕は知っている」、と書かれたメモが送られてきた。通知によると、私は裁判官の候補の一人として選んだ様だ。

1973年2月22日 早朝からライカー夫人が私に起きてほしいらしく、ドアの前に何度も来た。ハマキタさん（ミノルの苗字）はもう起きているそう。20歳の子供をどう扱って良いか分からないライカー夫人（お洒落で洗練された社交的女性）の姿を見るのは面白いと思った。

「ピンクの頬をした少年の傷つきやすい美しさ（日本で一般的に使われる若者の脆さの表現）」は、どうやら郊外のカントリークラブ行きつけの中流上層階級の淑女に、性的な恐怖の様な反応を起こす様だ。日中の明るいセクシュアリティのデザイン（見つめるには明るすぎる）。だから朝の10時頃に起きる以外選ぶ余地が無かった。

少年が帰った後長時間昼寝をした。

マリリンから電話があった。明日彼女と会う。

1973年2月23日金曜日 午後2時。マリリンとエンパイアステートビルディングの角で待ちあわせた。ユダヤ人の通勤者の様な若い男性と一緒にだったが、彼は自己紹介が終わった途端に消えた。マリリンがサンドイッチを食べる間、私はコーヒーを飲んだ。それから地下鉄でビレッジまで行き、小さな洋服屋の中へ入った。マリリンは友達のためにグリーンカード申請用の書類、小さい紙を2~3枚取りに行かなければいけなかった。彼女のイスラエル時代の友達だ。27歳。典型的なイスラエル人的な外見。微笑みの跡の無い、筋肉質なモナリザの様に見える。左手の全ての指が指輪で埋まっている。ひっきりなしにヘブライ語で話す。

その後ハロルドへ会いに「カトルック」へ行ったが彼は休みだった。フランス料理のレストラン「ラクレープ」へ行ってクレープ（甘い栗とバナナ）を食べた。マリリンはジョンの話をしたが絶望的な様子だった。私がそこにいることさえ腹立たしく見えたので、すぐに会話を中断して、ジョンの友達のパンとディックのアパートへ行った。

マネエリストスタイルの油絵が壁に掛かっていた。「禪」（漢字で彫られた）もあった。パンは健康的で綺麗な女性だ。

夜6時半頃家に帰った。疲れた。

1973年ババ 炮2月24日土曜日

1日中ベッドの中で過ごした。何一つしなかった。日本の家族とクレイグのことを少し考えた。

彼は私と2度と会わないつもりなのだろうか？もしそうなったらどの様になるだろう？作者として有名になった遠い未来のことを考えているのだろうか、私とどの様に出会って、どの様に全てが正道からそれて不幸な結果となったか書くのだろうか？私は彼の「ピン」（私の肩にピンが刺さったことについて書いてくれた詩）の絵を描くことがあるだろうか、そしてあの不思議な「砂漠」の顔？（砂漠の様に乾燥していて空っぽという表現）これはおそらく私の人生の最後まで残る思い出の一つとなるだろう。

おそらく、先生の机の上にあるチューリップの花びらを盗んだ思い出と同じ様に。

孤児になった気分になる。私の家族は私のことを覚えていなければ心配もしていないからだ。たまに母が、私が実際にどの様な人なのか混乱している様で、ためらうことなく庭の花の沢山の甘い思い出について書いてくる。雪が降っているかもしれない。

1973年2月25日日曜日 夕方5時頃起きた。朝の2時までテレビの前にただ座った。ドニーが寝に行った後に地下で木炭のスケッチをいくつか描いた。朝の6時まで続けた。足の寒さ以外に痛みは無かった。

「祝賀者」の背景の椅子を拡大しなければいけない。天井にさらに照明を追加し、管や水管、電線などの物を天井部分に加えた。絵画の中の絵画のありふれた魔力効果に落ち着いた。これは誰かが買うかもしれない。そうなればコロラドへ遊びに行くが、ドニーの教育費を払わなければいけない。作品を「ドニー」と名付けた。

タバコで気分が悪くなる。シャワーを浴びた後かなり気分が良くなった。家族のことを（特に母）考え過ぎる。手紙を書かなければ。MOMA（現代美術館）ではエドヴァルドムンクの特集をしている。1973年2月26日 日本の家族から手紙が届いた。最年長の弟のアラタに次男が生まれた。オタル（「完成した」または「到来」という意味）という名前だ。弟に何が起ころうとしているのか理解できる様な気がした（彼の共産党所属について考えた）。

それから、日本で中山氏の下で美術監督として働いているジョンベリーからも手紙が届いた。彼の手紙によると、マリンの為に帰国するかもしれないという事だ。彼は私に話す時感情的になり過ぎる。E.C.C.（English Conversation Circle、ワールドエンタープライズ社の支店の略）を閉鎖しなければいけないかもしれない。

地下室で正午から朝の6時まで絵を描いた。私の絵は風刺だ。フランスの似顔絵画家のドミエはあまり好きではないが、ユーモリストとしては中々悪くないと思う。笑い方には色々ある。

自分の絵について説明しようということほど無駄なことは無い。所詮、特定の瞬間に起きる全ての考えを、全てのブラシストロークに関連させて表現すれば良いだけだ。言い換えれば、完成後に、思考という無限の流れの全てを言葉で表現することは絶対に不可能である。

私は意味を入れ込んでいる（絵の前景の下の床の全ての小さい点の重要性）。この重要性を与えることが無ければ私はこれ以上に絵を書くことができないだろう。

この作品にもう一つのタイトルを思いついた。偉大なセンターピースの紹介。

1973年2月27日

クレイグから手紙が届く。長い返事を書いた。ジョンアープが紹介するエルンストの博物学をコピーして彼に送った。1日のほとんどの間クレイグへ書いた手紙のことを考えた。

クレイグは、コロラドの空気は涼しく乾燥していると書いた。山の頂上は雪で覆われている。リゾンとの関係は良いが、コロラドに出発した時

に決心していた様に彼女と別れるつもりだろう。クレイグは職探しをしている。大勢の大物とあった。おそらく、司法裁判所でカウンセラーか後見人として働くだらう。キャット、カズ子とマリンのこと、そして私が今ではライカー家と仲が良いかを知りたがっている。
手紙は短く素っ気がない。

「花」の絵を描くことを約束した。壁一面ほど大きくなるので、コロラドまで行くことになるかもしれない。

1973年2月28日水曜日 1日中起きなかった（午後3時ごろに寝た）。電話がいくつかあった。カズ子からだった。ついに彼女のボーイフレンドが日本からやってくる。

桜内：寂しい。うちに来てください。彼は少し狂ったようだ。ミノル：リッチ氏が外出しているので私と話がしたい。来週木曜日のパーティーに私を誘った。

寝付けなかった。夜の11時ごろに起きて、ソファの上で寝ているドニーを見つけた。彼は時々最初の夫のレイを思い出させる。何時間過ぎてからベッドに戻った。生理のせいで気分が良くなかった。エキセドリンを飲んで寝た。

1973年3月

1973年3月4日日曜日 何処かに行く予定だったが、何処にも行かなかった。多分寝不足のせいかもしれない、あまり気分が良くない。吐き気がして、目眩がする。ファイアーアイランドへ行く予定だったが、外は寒過ぎて風邪をひいたような気がする.....。

猫に綱をつけて散歩へ行った。猫のように興味深かったらどのような気がするだろう？ 辺りを見回し、匂いを嗅ぎ、無限の集中力を持って周りに周りにある全ての物を触り回る。同じことを何度も繰り返して、疲れたら丸くなって眠る。決して考えず、決して反映したる想像することは無い。猫の内面的なイメージとは、非常に複雑でカラフルであるだろう。そして、眠ることによって全てのイメージを対処する。猫とはなんという精密な機械だろう！

1973年3月15日木曜 カズ子とアシザワが訪問する。
左からマツキサミズ、ライカー夫人、カズ子とアシザワ

ライカー夫人がまたもや神経質になり、誰も気にしない人についてヒステリックに話している。おそらく、切れ目のない会話でその話がもう少し興味深くなることを願っているのだろう。

淡いブルーのキャンドルに火が灯されていた。青い花がテーブルに飾られて、食卓のフォークやナイフなどが輝いていたにも関わらず、人間の間を流れる海のように深く、鋭い急流の空虚さを感じる。彼らの頭上から白い線を引いて空間の一点で全員を結ぶと、何処かで互いに交差することを想像すると、線の無い、互いに交差する奇妙なデザインが見えてくる。

今夜は霧が深い。カジュアルで大きいシーフードレストラン、ナッソーへ行ってから夜の海を見に行き、「ピーチパブ」と「リビングルームズ」（若者のパブ）へ行った。皆退屈しているように見えた。身体障害の若いブロンドの女性が歌っていた。

1973年3月16日金曜日 誕生日。37歳。驚かないで！マリナから電話があった。外出中だった。

1973年3月17日土曜日 ハマキタミノルが家に来た。ドニーがシシカバブを作った。食べて話してから夜11時ごろにディスコへ行った。体調が良かったので、到着するまでの道のりを楽しんだ。そこは満員だった。天井まで登った人達までいた。2~3人の女の子達が1930年代の化粧と派手な装飾をして（しばしば「アンディウオーホールスタイル」と呼ばれた）、踊りながら歌っているふりをしていた。あまり上手なパフォーマンスではなかったが、若者達は肩を並べて立ち、非常にうっとりして見つめていた。私にはその熱意が理解できない。おそらく、舞台のパフォーマーが単に真似しなければいけない物の真似をしているだけだったので、観客も完璧な観客の真似をしていただけのことだったのかもしれない。バンドが演奏すると同時に、大抵の人達が踊り始めた。勿論、バンドのメンバー達は「見る」甲斐があった。

だが残念なことに、バンドは踊りの価値しか無かった。面白い現象だ。彼らは「見なければ」いけない物は「見て」、「踊らなければ」いけない時には「踊った」。

1973年3月18日日曜日　ミノルは朝の6時まで残った。少年らしいロマン主義のように儚い。彼は私に恋をしていると言った。リッチ氏は「ヴェネツィアの死」の人生を歩もうとしているのだろうか（トーマスマンの、年上の男性と若い青年の恋愛についての小説）？

1973年3月19日月曜日　藤田さんから手紙が届いた。今井さんとキカワさんの住所を見つけた。ハガキにその住所を書き留めクレイグに送った。猫を綱につけて郵便局へ行った。ハガキのイラストはマックスエルンストの「アイドル」だった。恋しい。

1973年3月20日火曜日　絵画祝賀者の木炭の下書きを終えた。

1973年3月21日水曜日　感情的な文脈でいっぱい立場は書きづらい。口喧嘩を少ししたせいで、ドニーが最後の言葉に似たような何かに飛びついた。結局、私にとってドニーとの生活は重要になり始めた。本音を言うと、ドニーの様な人は芸術家にとって理想的なパートナーである。朝の5時ごろまで一緒に話した。

外出をすることが非常に憂鬱になった。完全にドアを閉めて地下に留まり、茶を飲んだりドニーと無害な会話を交わすなど差し当たりの無いことをして、外とのつながりを切ってしまいたい。多分私は遠くの山を眺めて何かに対してドアを閉めているのだろう。

1973年3月23日金曜日　リサガーバーから手紙が届いた。私の絵画と女性であることを比較したコメントについて妙な誤解がある様だ。実は「女性であること」などの表現に対する私の意図は、クレイグの存在の重要性を自分に説明することだった。私にとってクレイグの存在はガラス体の様な性質である。絵（祝賀者）の中にもっとガラスのオブジェをディスプレイしたい。そのために私は「女性であること」という言葉を用いた。だが、私の印象では、その言葉を女性の解放運動と間違えられた様だ。もしもその様な動きに何も興味がない、と言ったら彼女はどうか答えるだろう？ 実際のところ、その様な運動に嫌悪感さえ感じるほどである。

黒川の映画、「用心棒（「ボディガード」という意味）」を観た。中山の「ポーズ」がこれで明快になった（仮死状態）。思ったより単純だ。ドニーのスケッチ（祝賀者の主要人物）をして、下塗りの修正をした。朝の7時ごろまでああたこうだと迷いながらいじくりまわした。「美しい

朝」だった。

1973年3月24日土曜日 憂鬱だ。朝の3時50分。憂鬱。哀しくて退屈。「攻撃と敗北」と言う映画をテレビで観た。感情はもはや重要では無くなった。現実的かどうかはカテゴリー外だった。特に芸術的かどうかは問題外だった。第二次世界大戦中のイタリアとロシア兵士達の戦いの描写である。人類に反する直接攻撃。フェリーニが突然安っぽくなる。

夕方6時に起きる。ライカー夫人が私の猫をきちんと扱っていない、という考えに執られる。私の周りをウロウロして何かを怖がっているようだ。少なくとも猫に幸せな環境を与えられる様に金持ちにならなくてはいけない。ライカー夫人から深刻な敵意を感じる。彼女が嫌いだ。なるべく早くここから出ていかないといけない。

絵を描く気になれない。

あの愚かな人！私の絵画に対してまで意見を言ってくる。実際には屋根裏の家賃を私から儲け取っている馬鹿者。彼女が嫌いだ。

1973年3月25日日曜日 シティに行く。午後1時5分の電車に乗って、カズ子のアパートに2時20分に着いた。アシザワはベッドに座り、奇妙なタロットを使っていた。カズ子の書類をまとめてから、アパートのマネージャーと話し、地下鉄でダウンタウンにある入国管理所まで行った。太陽が出ていたにも関わらず、空気は憂鬱で重かった。夕方5時くらいに帰宅した。胃痛の薬を飲んだ。

7時半にドニーとシーフードのレストランへ行き、「漁師の冷たい料理」を食べた。ロブスターの尾を中心に、サラダ状に用意された海老、蟹、ツナなどが周りを囲んでいた。美味しかった。6ドル。そこからリンブルックにある映画館で「逃走」を観た。つまらなかった。一番良かった部分は「逃走」シーンだった。このタイプのありきたりの映画より変わっていた。帰ってから、ドニーが私のバッグの上に置いたイヤリングを見つけた。深く感動した。

マリンから電話があった、彼女の元の彼、ジョンベリーが6月ごろに帰ってくるはずだ。

1973年3月26日月曜日 夕方の6時まで寝た。眠り薬のおかげで12時間以

上も寝た。とんでも無いことだ。「オスカー」アカデミー賞をテレビで観た。ライザミネリとマーロンブランドが勝った。ハリウッドのアメリカンインディアンに対する偏見を口実として、ブランドは賞を拒否した。（新しい愛人のプレッシャーによるものか？）

リック（フミの最初の旦那さん）の両親にミノルが立ち寄るとのことと、彼らの似顔絵をボールペンで葉書に書いた。

今年中には油絵を終わらさなければいけない。

肩が痛む。ミノルから電話があった。今日カリフォルニアへ出発する。4日間の電車での旅行だ。マドカ、東京にいる私の弟、を尋ねる様に言った。

朝6時。鳥が鳴き止まない。

アナテマと活力について考える。結局美術はアナテマと進歩の結果ではないか？それが侵すことのできない美術のポジションを占める、活力の理由である。これが装飾美術との性質的な違いだ。相互に排他的である。

1973年3月27日火曜日 午後3時半に起きた。髪を洗った。化粧をした。6時にアメリカアーティスト同盟の会議でシティに行った。会議が行われたサルマガンディクラブのビルまでの方向を警官に聞いた。間違えた方向を教えるだけでなく、デートにも誘ってきた！サルマガンディクラブは5番街の9番通りにあった。内装は古いがあまり優雅ではなかった。期待通り、慢性の「小春日和病」に苦しむ様な水彩画が、あまり考慮なしに壁にかけられていた。その中で、ボートの絵はダイナミックな構図で際立っていた。受賞したものだった。芸術を批評する私の「目」は変わっていない様だ。私たちは板張りの床に並ぶ、折たたみ式の椅子に座ることになっていた。

クラブ長は舞台の上でマイクと格闘し、委員会のメンバー達は全員気を取られず座っていた。彼らの平均年齢は50～60歳の様だ。新しいメンバー達は20代半ばから30歳くらいに見える。皆が私に注目した。一般的な雰囲気は、異端者に対する敵対的に振る舞う、という一般的な保守的な伝統だった。

前クラブ長のリルジャーガーさんは、体の大きい楽観的な人相をした、神経質で小さな声で話す人だ。自己紹介をする際、私にかけられる言葉が無

くなってしまった様だった。ロルフファブリ氏が新しいクラブ長として選ばれた。そして私は「官司裁判官」となった。彼らによると、去年から新参者達に門を開ける様になったという話だ。長髪の若い男性が3人新たに受け入れ、私はたった一人の女性だった。

軽食はコーヒーとサンドイッチだった。新しいメンバーの、若い中国人を話した。中年のユダヤ人男性と知り合いになった。新メンバーの一人が車で家まで送っててくれた。

1973年3月28日水曜日 アメリカアーティスト連合のメンバーになるということは、名誉なことのはずであった。新しいメンバーとして受け入れられた興奮を隠しきれない、40代半ば位のカップル(*1)の姿が印象的だった。彼らはメイン州のロングアイランドでギャラリーを経営し、子供達の絵画や他の「感傷的な」作品を扱っている。アートというビジネスだ。あの若い台湾系中国人アーティストの商業的精神を思い出す。

この全てが私にオレゴン州のアルバニーアートセンター(*2)を思い出させる。一つの問題が解決すると他の問題が起きる(*3)。私はアナセマタイザーになるのだろうか(??)

ジョンベリーからの手紙。加藤さんと一緒に、英語の単語と子供用のトランプのイラストが飛び出すギャンブルマシンの販売をしている。彼の手紙は予想以外に長い。

「文書マニア」という病気かもしれない。「絵描きマニア」はあるだろうか？半分以上のアーティスト連合はこのカテゴリーに当てはまるかもしれない。

規則的な思考は人間を哲学者、直感的な思考は詩人を構成し、思考が無い者は職人になる。この全てを集めるとアーティストになる。(素晴らしい発現！)

1973年3月29日木曜日 一晩中かかって(日本語で「夜」の漢字は何故「死」に似ているのだろうか?)中山さん(*4)に手紙を書いた。主な内容は私の現在に置かれる状態と陶器の展示会についてだった。(*5)

*1 その前の晩、新しく受け入れられた会員の旦那さんが私を家まで送ってくれた。

- *2 円熟した芸術家によって作成された（主に専業主婦達）
- *3 芸術家達の活動の商業的な側面
- *4 ECGの総務（私は彼のアシスタント）
- *5 共同住宅の運営に代わる、中山さんに提案したプロジェクト。
肩が痛む。

私の絵「凱旋」に積み込まれたガラクタのせいで、ジョンベリーに「街路清掃人」と呼ばれた（全てデラニー夫妻の地下で見つけた物だとは知らずに）。

実際、私がニューヨークに滞在する一番の理由は、このゴミ漁り精神から来ている。

1973年3月30日金曜日 年配の女性達が、下でうるさく怒鳴りながらブリッジをしていた。おそらく、彼女達は怒鳴ることで精神機構を調整しているのだろう。水桶の中のおもちゃの家と木 — その中で生きて動き回っているものは鳥だけだ。この装飾の中で、飾られている装飾品は古く見苦しい（全く、外見以外何も残される物は無い！依然として魂は外見に哀れにしがみつく。これは魂の高齢化する空間の叫び、教えである。昨夜、台所で「ブリッジパーティーや 委員会のための軽食の作り方」という題名の薄いパンフレットを見つけた。ライカー夫人は郊外のマトロン役を誠実に演じ、特別な銀の食卓セットと皿を出して来た。そ

して、この2~3日間、飾り付けられた一部屋一部屋に念密な注意を注いでいる。どのくらいの頻度でこのような集会を開くのだろうか？

この集会のために、彼女の息子達、家、時間、お金と最後に旦那さんと自分自身を犠牲にしている。見栄を張っているのだろうか？— 高くつき過ぎである。悲しい人生....。

1973年4月1日 ニューヨークタイムズに「今日はラフマニノフの誕生日」と記載されていた。作曲家、シェーンベルクは、ラフマニノフの作曲は大衆の間で人気があるがオリジナルだと言った。

ラフマニノフは天才のピアノの演奏者で、貴族的なポーズは想像上のものであるが、この古き良い思い出の扉を閉じるべきだ（私の考えでは）。このように際立つ強力な思い出を所有し、多くの「オリジナリティー」を同時に維持することはまさに奇跡の完成だ。ロマンス主義の

最も美味しい部分を掬い上げて、しゃぶしゃぶ（一般的な和食）に料してしまおうとは、彼の天才の証明以外にほかならない。

時々オリジナリティーは単なる不可能な思い出と、不合理な相互交流でしかないと感じる。超自然的な瞬間に全てを上回り、前進していく能力には、本質的にオリジナリティーとの関係は無い。能力とは明らかな自己成熟を経験することによって、また沸点にたどり着くことによって初めて誕生するもので、タイムスピリットという液体物質から必然的の様に飛び出す。だから、ミケランジェロ、ベートーベン、ダヴィンチには最も熱い才能（能力）があり、本家となったのだ。

1973年4月2日 クレイグから手紙が届く。色が淡く薄い。玉ねぎで作った紙を通して見ている様だ。彼は公園が好きな様だ。ミロとゴッホの版画を買って壁に飾ってと書いてある。壁を飾ることが好きらしい。大きな（巨大な）花の絵を描かなければいけない。時が経つに連れて、他の何かも滑り離れていく。バラの花びらが1枚ずつ落ちていく様に。

残りの花びらの中心に、思い出は静かに息を止めながら留まる。段々と不透明になくなっていく。全てが浅く薄くなった。下から声が聞こえる。私を凍らせる。

おそらくクレイグの部屋を訪問しているのだろう。額がイライラと怒りでいっぱいになる。哀愁的な眉毛。こめかみは不思議に天使のこめかみを思い出させる。美しい手と髪の毛。動物の様に敏感で困惑した目。音の無い活気のある鋭い顔立ち。私はそこに座り、時間を忘れて座り続けていく。あの途方もなく感情的なライセンス、説明が不可能な甘さと暗い静けさの突然の到来。

そして突然ライカー夫人が上がってきて「こんにちは」と言った。

1973年4月3日火曜日 地下室で午後1時から5時まで絵を描いた。ああ！全てが冷たい！黒猫が汚い青いカーペットの上で丸く埋まっている。動かずに、私の気持ちを背中で感じ取っている。まるで振り返って私を真正面から見ると、静けさが崩れ落ち理解ができなくなることを知っている様に、そこに座ったまま私に背中を向け、状態を把握しようとしている様に息を止めている。私の感情は、その光沢のある黒い背中の方に焦点を求めている。

天井の配線をモチーフとして使おうかと思っている。
多分コロラドへ行くべきかもしれない。

1973年の抜粋の終わり

Wednesday 4th - April 1973

殆ど一日中寝ている。ただやたらと眠い。夕食後は何もせずにテレビだけを観る。

I

和子から電話があった。移民向から通達があったのだそうだ。金曜日に同行してくれというわけ。

ペン駅で道をたずねたお巡りから電話あり。明日行けぬ、と言ったらしょんぼりしたような声で駄目ならそれでいいと言う。お巡りに対して別段偏見があるわけではないのだが、剣銃を持った退屈な人間と時を過ごすという事態に恐れをなした次第。

クレイグ宛に手紙を書く。途中でそれ以上続ける気力がなくなったので、そのまま止めて封をしてポストに入れに行く。午後二時。それから地下室で五時近くまで作画。

陽が出たり出なかったりしている。

虚無感のようなものに取り憑かれている。コロラドの山の中へでも行って、一人でぼんやりとしていたいなどと考えたりする。他人の家の中に居ることが私の神経を消耗させるのだ

3rd of May 1973

史から手紙がある。リックと別れて渡来したいという。早く来るようにと返事を書いて出す。アーティスト/USA宛にスライドを郵送。

4th of May 1973

猫の調子が再度悪化したために病院へ連れて行く。雨。手術の必要があるために入院。

5th of May 1973

ニュージャージー州プリンストンへビルを訪問。晴。プリンストン・ジャンクション駅は幌馬車時代の家(広場)をそのまま持ち越したような格好で緑樹のさ中にぽつりと立っていた。

側に池があり、樹木が池のまわりを囲んでいた。ビルが来るまで、池の側で新聞を読む。ウォーターゲイトの件、プリンストン大学では校舎の一部を"閉鎖"したのを"拐"して、祭りのようなものをやっていた。ロックバンドが二つ、絵画、写真、工芸品等の屋外展示。芝生に群っていた若者達の様相は、ここ数年間そのままに時間という言葉を取り取って空気の中に焼き付けたかのように変化がない。

長髪、Gパン、メキシコ流のケーブギター、裸足、気取らないポーズ、諦観ということを真剣に慎じてでもいるかのような姿勢。ビルと他二人が住んでいる家は町のはずれの、ドッグウッドが白い花を咲かせている風景の只中にあった。ピアノがあった。暖炉に火を灯し、ワインとチーズが出た。アイロンホースという名のバー・レストラン、ダンス場を兼ねた白塗りの家で夕食。鶏の照り焼。ブラディ・マリー。午後十一時五十分の電車に乗り、帰り着いたのは二時過ぎだった。

6th of May 1973

殆んど床の中で過す。一日中うとうととしていた。午後六時に起床。朝の八時まで作画。

7th of May 1973

晴。緑。花々。華氏六十度。午前九時半。午後六時起床。午前二時より午前六時まで地下室で"作画"。絵の中の絵の背景を変更することにして、その下塗りをする。

17th of May 1973

今週一杯、早朝に起床し、一日中作画に当って過ごした。今日は気分がよくなり(目まいがする)十一時まで寝ていた。地下室で絵の前に座って三時間余り、何もせずにじっとしている。何もせずに？煙草をやたらとふかしていたのではなかったかー。リサからの手紙(昨日到着)に就いて考えていた。要するに、女であることという"特殊"な条件をどう扱置するか、ということ。若しも男が、男であるという事態に就いて

、女並みに執着していたとしたなら、文明の進行返応が半減していたことだろう。少くとも機械文明の出現にもっと遅れていたに相違ない。女に対する性的指向の対象であることがそれほど存在の核心にまで精緻していたとしたならば、現世のオブジェの大半は不用となり、森の中で呑気に暮らしていたことだろう。絵描きであることと、女であることは意識的には両立不可能だが、どちらか片方が無意識的存在と化すことに依っ

て共存可能となる。つまり、絵を描く女と女の絵描きということ。後者の場合、性の対象としての男からのかなりの隔絶が必要。

19th of May 1973

和子、芦沢を同行して、ニュージャージイヘビルとジャックを訪問。すき焼を料理。和子御銘釘とあり、ビルの鑑賞の対象となる。ディスコでダンス少々。一泊して翌日帰宅。快晴。ドッグウッドの花はまだ散らずにいた。

26th of May 1973

午後マリーナから電話があり、夜九時頃彼女のアパート(クイーンズ・ロンドン・アパートメント)へ出かける。マリーナは髪を短かく切り(流行中)兎の毛皮の短いコートを着込み、すっかり都会風。モデルを依頼したことを後悔する。月曜まで滞在して行く。連休中に陰鬱な天候が続き、部屋の中で漫然として越す。日月が通過するのが恐ろしいほどに早く感じられる。

16 June

ビル（ダニーの友人）が木曜から滞在していたが明日の朝出発するということ。ここ二、三日毎夜のようにアルコールとマリワナに浸り続けている。頭の中では様々な”思想”が往来し、馬鹿のように眠ってばかりいる。

ソフト・シェル・クラムを蒸して喰べたのが最大の饗宴。貯水池へ真夜中に出かけて水泳をすることがこの上ない冒険。

暑気。95Fを越すことが時々。

枝庭でブランコに乗る。ビル兔を追いかける。

17 June

リックの父親から史のことに就いて電話あり。リサへの手紙を仕上げる。モーゼス氏宛に一筆。

バラの花が盛んに咲き開いている。気温は比較的冷涼。

余りゴロゴロしていたので罪悪感に取り憑かれる。

クレイグに手紙を書こうとしたが、何かしら核心のようなものが妙に空疎に感じられたので取り止める。代わりにデイヴィド宛に冗談を書きつらねることにした。

ジョン・ベリーに史のことを依頼してみようかとも考える。明日一日起き通して、昼夜のしきたりに従応しようかと思う。さもなければライカー家の風習から余りにも遠ざかりそうで気になる。

30 june

ここ数日、ダニーの友人ビル滞在。

夜、マリーナ来訪

1 July

ビル、ビルの友達、ダニー、マリーナと共に、海岸で過ごす。ビルの両親が借りているカバナを共用。快晴。プライベートビーチのせいで混雑はしていなかった。カバナの前に椅子を出して、一日中寝ころんで日に当たっていた。ビルの妹が赤ん坊と女友達二人ほど連れてやって来る。

二度ほど海水に浸ったが泳がなかった。マリーナの肉体美に男性達は魅了された形。夜、イタリアンレストランへ食事に行く。貝を食べる。遅くまでビル、ダニー、マリーナと喋って過す。着物がマリーナによく似合った。

2 July

朝、ビキニを買いに出かける。

海岸へは出かけずに、裏庭でマリーナと喋って過ごす。いささか退屈。

3 July

ビル、マリーナ去る。

6 July

ダニーと海岸で過ごす。快晴。

砂浜は混雑。水へは一度も浸らないで寝ころんでニューズウィークを読んで過ごす。よく日に焼けた。

7 July

藤田のり子より音信あり。中山氏の件に就き、週刊誌記事のコピーが同封されていた。

11 July

ビル来訪。マリーナから電話があり、ニュージャージーへでも出かけるかという話。和子か芦沢の訪問を週末に控えているために、こちらへ出てくるようにと伝える。ジョン、アル、などのことにつき約二十分ほど電話を通じて話す。ビルとマリーナの折合いが余りよくないために、ダニーがマリーナの訪問を渋る。R.I.L.Lに乗って、職場から直行するようにと、午後十一時過ぎに電話をする。食後、ダニー、ビルが去った後、作画少々。午前一時近くまで地下室に居る。気分的にいくらかスランプ気味。

12 July

ダニー、ビルとバドミントンをする。快晴。多少風があり、羽根が思うように飛ばない。ビルが散髪に行った後、地下室で作画。夜、クレイグ宛に手紙を書く。主として中山氏の件に就き。ビルの友人達がダニーを訪問している様子。クレイグより、移転通知の葉書あり。

13 July

午後六時過ぎ、警察達がやって来る。七時近く、マリーナ到来。

和子に電話をして、ここへ来ることを取り止めて貰う。何のためか解らないが”事情が解った”と和子が応答、多少不審。

週末は雨天という予報。気分が晴れない。起床は午後。ビルは既に何処かへ行った後。マリーナ、和子、芦沢等の到来を控えて、ダニーにビルを引き留めるようにと云う。

14 July

クレイグから手紙がある。短文、殊更に云うこともない様子。工場仕事を止めて青少年隊動員の職に就こうとしているとのこと。キャンプ、テニス、ブリッジなどをして娯楽中とのこと。晴。芝生の上で、マリーナとお喋りをして午後を潰す。ダニー帰宅。ナサウ地方新聞にダニーの件記載。ダニー帰宅の一時間前にビルから電話あり。事情を話してビルの立場を追求。適切な時期に出頭して一切の責任を取ると云う。そうあればよい。クレイグ宛の手紙を出す。

15 July

午前十時起床。マリーナとダニーは未だ眠って居るらしく、家中に物音無し。地下室で約三時間ほど作画する。午後二時近く、マリーナが降りて来る。六時近くまで地下室でマリーナと喋って過ごす。二十五歳の娘の内面報告を心配事病か、カウンセラーかのような気持ちで聴く。雨時折、曇って専ら寒い。ダニー、ビルとの電話会話の集録に専念。夜更けまで、マリーナと談話。ヘルマン・ヘッセのステッペン・ウルフ（”高揚な魂”？）に夢中になっている様子。ボーヴォワールの”女ざかり”と”娘時代”を奨める。明日、電話をすると、マリーナに約束。

16 July

午後一時過ぎ起床。固い床の上で眠ったために、全身が痛む。緑樹の図面を眼に映らせ、チャイコフスキーのピアノ、コンフェルトを耳に響かせ、約二時間、椅子の上で文字通りたじろぎもせずに寝そべって過す。ダニーの弁護士からは連絡がなかったようだ。マリーナ、早朝に去る。晴。

17 July

移民局宛に手紙（住民登録票に就き）を出す。変名のための書面を届出して以来約三ヶ月。ダニー、弁護士に会いに出かける。

ほぼ正午近くまで熟睡。余程疲れていたに相違ない。快晴。

18 July

和子より電話あり。ヴィザ手続の件に就き八月十四日に移民局出頭の通知があったとのこと。チョドス氏に会うようにと奨める。

晴。バターフィールド件に依りウォーターゲイト、方向転換した模様。ニクソン、記録物を大記録極秘物件と銘じて、上議員特別コミッションへ提出することを拒否。遠隔操作式ストレス検出機の記録に依ると、ジョン・ディーンの信憑

性が歪められたとのこと。ミッチェル氏、相当に嘘をついている様子。（ニューズ・ウィーク参照。）

午後十一時から午前四まで作画。画中の画をポラロイド写真に依って構成。背景には何も無いほうがよいかもしい。

19 July

午後、マリーナより電話あり。ジョン・ベリーに連絡をしてみるように依頼される。ポーヴォワールの”第二の性”を買ったとのこと。”女ざかり”の英訳はまだ出ていないとのこと。

午後二時起床。昨夜はよく眠れなかった。

三時から六時まで作画。

晴。暑い。芝生で水まき器がまわっている。

午後九時、ジョン・ベリー（セント・ルイス）宅に電話をする。彼氏は留守だった。

20 July

午後一時。ジョン・ベリーからの電話に依って起床。セント・ルイスの友人達との再会を楽しんでいるとのこと。今井氏とは未だに雇用関係にあり、依頼されたカードのデザインをしているとのこと。

ガン氏には未だ会っていないとのこと。

九月三日頃に渡日の予定とのこと。

マリーナには渡日計画を話さないでほしいとのこと。

三週間後頃に来ニューヨークとのこと。

低い落ち着いた声だった。マリーナが”ステッペン・ウルフ”を読んでいるということなどを話す。

午後四時頃、和子より電話あり。来週火曜ペン駅で待合せることにする。チョドス氏に会いに出かける予定。

計約七時間作画。

曇。夜に雷雨あり。午前五時、雨はまだ降り続けている。

午後二時頃、マリーナの会社に電話をしてみる。マリーナは、どうやら、マリーナ・シェファードといった風な名（偽名？）で働いているらしい。欠勤。

21 July

雨。午後三時起床。マリーナから電話あり。ジョンのこと。本のこと。田舎に住むこと等話す。

暗い空。空気冷え気味。昨夜はよく眠った。

ダニー、ベッドのマットレスの間に板を敷く。寝心地よし。

午前六時まで作画。

珍具六ヶのためにさめを一匹殺害するとは罪な話だ。人間という動物。

音そのものだけによる快感と、色そのものだけに依るそれ。構成分子が母体から隔離された時に生ずる独立価値。例えば、ベートーヴェン中の一音とか、ミケランジェロ中の一色とか。或いは、構成形式（構図 etc.）だけを取り分けて抽象化したものの効果性。主客転換のやや馬鹿げたサンプル。主題中に潜む人間性或いは哲学（一例にすぎない）性が問題。”文字化”との区別が課題。

22 July

一日中テレビを見て過す。

N.Y.タイムズにウォーターゲートの陰謀記事載る。

25 July

移民局より通知あり。手続には六ヶ月かかるという訳。午前十時起床。午後は作画。

晴。月経。気分が悪いがさほどひどくもない。

夜は涼しくて過ごし易い。ジョン・ベリーに手紙を書かねばならない。億劫。

ジョン・ベリー宛に手紙を書く。地図を同封。

睡眠薬服用したが、明け方五時過ぎまで眠れなかった。

26 July

午後三時起床。雨。夕暮れ近くに晴上る。午後四時半、マリーナに電話をする。和子のルームメートの件を持ち出したが気が乗らない様子。代りに、家を借りて共同生活をするについて話す。

ジョン・ベリー宛の手紙を出す。

夕食後、作画。午前五時近くまで。

ジャウク・パァ・ショウで、ベーカー上議員を観る。魅力的。ニクソン大統領が行政権限を盾にとっている。テープの提供を拒否し続けているために、三者間での権限事項が台頭している様子。憲法の注釈あるいは修正が必要になるのかもしれない。法と徳との世にも赤裸々な対決。法を守るあまりに毒を飲まねばならぬような結果とならなければよい。

涼しい。

27 July

午後一時過ぎスピレーンといったふうな名前を名乗る人物より怪電話がある。鼻にかかった京都訛で一言おき慎重に喋っている。最初アライド・アーティストの会合で出会った画家の一人かと勘違いして喋っているうちに様子が不審なのでこちらから明日電話をするという、急に話題を転じて、“性”のことに就いて話そうという。要するにオブシーン・コールの一種だったか。声の調子に聞き覚えがあるような気がして仕方がない。ビルが嫌がらせをしているのか。それとも中山氏と関係のある人間の操りか。あるいはクレイグの従兄弟かもしれないなどと考えたりする。スパイロと名乗ったのを聞き違えたために、面白がって図に乗ったのかもしれない。八月十二日に待合せをしようというのが目標だったらしい。何のためだったのだろうか。気味が悪くなる。

もしもスピレーンという偽名を使っているのだとしたなら、探偵物気狂いの仕事なのだろう。多少面白くも思う。二時間程、作画。晴。昨夜は又眠れなかった。“貴方は美しい”などと言われるとつい調子に乗って喋り出すのを計画した上での“本恥”に依るものかもしれない。

28 July

植原照子より手紙あり。甲府は中山氏の後援なしでやって行っているとのこと。ミシェル以外の外人講師は皆離日したとのこと。

アーティスト / USA より、送金催促の通知あり。
午後二時過ぎ起床。晴。作画。頭痛。

31 July

午前一時近く、史より電話あり。
リックの両親が突然意志転換して、渡来のための保証を取り外す旨の電報を大使館宛にしたとのこと。卑劣な行為だ。

ダニーの弁護士に意見を尋ねて貰う。
史の渡来を阻止することに依って、離婚のための“時”を稼ぐつもりらしい。
史宛に速達を出す。

作画。

1 August

午前六時半、家へ電話。父が出る。午前七時頃史より電話がある。大使館と交渉した結果、リックの手紙に依る結婚証明があればよいとのこと。一段落した形。

リサから手紙がある。ビルから長い手紙が来たとのこと。クレイグに私の住所を知らせたとのこと。

約十時間作画。

2 August

クレイグより速達がある。英会話サークル時代の”スパーヴァイザー”として、保証人となってほしいという話。”ザ・コネクション”という名称の場所で青少年保護の仕事をするのだそうだ。やや諧虐的な変な文面。怪電話を連想する。注意すること。何のためか知らないが車の緊急ブレーキと、ターン・シグナルを直すのだと文末に書いてあった。展覧会用の水画のためにコロラドへ行けないと書いてやったことが頭に來ている様子。三十日に、私の名を保証人として”ザ・コネクション”へ登録したとのこと。

リサからの手紙を受け取ったとのこと。グリーン・リヴァーをコロラドからユタへかけて渡ったとのこと。午前三時まで作画。

3 August

マリーナより電話あり。ジョン・ベリーが来ているとのこと。

午後六時頃起床。食後、マリーナ、ジョンと電話で話す。ジョンは調子がよさそうな様子。

明日ここを訪問することこと。天候がよかったら海岸へ出かけようとのこと。

夕食はホットドック。牛肉不足（ほぼ九十パーセント近くの牛肉業者が閉鎖されている）ため、肉恐慌を來たしそうな模様。食料品の値上がりは見事なもの。ニクソン氏の”第四フェーズ”がもたらした怪現象。

テレビ”六十ミニッツ”にヘーグ大将（？）が現れて、しどろもどろにニクソン氏を弁護していた。ハルドマンの弁護士に”リトル・ジャップ”と呼ばれたために、ハワイ州のダニエル・井上氏が現れて、氏の経歴等を紹介。サム・アーヴィン・コミッティの一人。

4 August

午前零時より、午前八時まで作画。午前八時半頃、史よりの速達が届く。八月十二日頃帰来する予定とのこと。大使館からは保証人の必要がないという返事があったとのこと。

晴。朝方、猫と表で遊ぶ。

クレイグの手紙のことに就いて考える。私のことを記憶喪失癖があるとか、二重人格者かもしれぬとかと考えているかもしれないなどと思ったりする。午後三時近く、ジョンとマリーナがやって来る。海岸へ出かける予定だったが、時刻が遅くなったためポーチに座って話し込んで過す。ジョンは痩せてあまり見栄えのしない様子だった。マリーナはいささか事態の処置に困惑しているような形。F.C.C、中山氏 その等に就いて少々話す。

5 August

ジョン、マリーナ、ダニーとナサウ・ビーチ海岸で過ごす。晴。波浪はいくらか激しいように思われた。午後九時起床。

6 August

晴。一日中眠気が抜けない。作画少々。午後一時起床。

7 August

晴。午後一時起床。作画少々。

憂鬱感に取り憑かれる。移民局より、住民登録カードが届く。史より、ダニーの両親宛の小包が届く。美しい壺。

2 September

史到着。（日本より。）元気で健康そうな様子。冗談などを云ってよく笑う。

晴。空港は混雑していた。

30 September

史、マンハッタンへ移転。東レに就職。晴。史の引越が片付いた後で、史、ダニー、マリーナとグリニッチ・ヴィレッジへ出かける。洋服屋を二、三見て歩いてから、ワシントン広場でぶらぶらする。ギターをかき鳴らし乍ら下手糞な歌を歌っているグループが二つ。妙にくねくねと踊っている放心状態といった態恰の若い男（半身裸）が居た。黒い服を纏ったパントマイム屋が印象的だった。硝子張りの箱の中に押し込められた人間の孤独さか滅を表明しているつもりらしい。朝鮮レストランで夕食。

2 October

史、三菱に転職。

3 October

絵、終了。労働の後の感想外には殊更の感慨なし。息づくものがない。製作の途上で生命の脈絡のようなものが敗走していった。

“わな”にかかったような気持がする。無臭、透明、不動、正体のない”日常意識”というわなが冷んやりと私のまわりを取り囲んでいる。その中でりすのようによくんでいる自分。

5 October

鬼川氏より電話あり。在来中。

6 October

クレイグ、ディヴィド宛に手紙を書く。ユダヤ教の正体に当る。

MDMの正面で鬼川、和子、史と待ち合わせる。NBCで時間をつぶした後、居酒屋で夕食。納豆を食べる。鬼川は警官に納っているとのこと。中山氏は西ドイツ・フランクフルトにいるらしいとのこと。史の所で一泊。晴。エジプト、シリア、イスラエル間に戦士。

7 October

晴。午後、一時。コロシウム前でマリアとその友人と落ち合い一同揃ってブルックリンの屋外アート・ショウに出かける。マリアの父親、史の似顔絵を描く。夕方、朝鮮レストランで、マリーナ、その弟、そのガールフレンドと落ち合い夕食をする。史をアパートまで送った後、帰宅。帰途の電車の中で写真を撮っているという若い男と話し込む。ボブという名。

イスラエル戦に就きマリーナより知らされる。

11 October

アライド・アート・ショウに投入。ダニー帰宅後、グッゲンハイム、メトロ等をまわり、午後五時頃、史とオフィス前で待ち合わせる。夕食を済ませた後、帰宅。晴。

13 October

史、訪ロックヴィル。駅から買物に直行、半日、ショッピングセンターで過ごす。史、夜泊。晴。

14 October

午後四時半、マリーナとエムパイアステート・ビル前で待ち合わせ。後、イスラエル画家ベンジャミン・レヴィ（LEVY）の個展へ出かける。感銘少し。デヴィッドと名乗るお洒落男と知り合う。

15 October

クレイグ宛の手紙を書く。

18 October

次の絵の構想が纏まる。ロブスターを描くことにした。”破壊”が主題。

19 October

史、会社よりロックヴィルに直行してやって来る。

20 October

ダニー、史、とベア・マウンテン(BEAR MT.)へ出かける。晴。紅葉。

21 October

海岸へ出かける。晴。

22 October

史と買い物をして過ごす。史帰宅。

23 October

ニクソン、テープをシリカ判事に提供することに同意。ロブスターを買いに出かける。

24 October

アイランド・アーティスト.の開展レセプションへ、史、マリア、ダニーと出かける。ベンジャミン・レヴィ展で一寸話しをした男にまた出会う。作家だとのこと。ブラウン夫妻が来ていた。

ニュージャージー・ターン・パイクで霧に依る交通事故があり、十人死亡。ナショナル・ギャレリーは正面玄関の辺りを改装したせいで立派に見えた。三年前よりも宗教は少なかったが、模的に上昇した模様。”写生派”は桁に走るばかりで、増々正気にとぼしくなっている。”自分の穴”の中を綺麗にすることばかりに余念がない様子。増々興味を失う。

私の絵は興味の的になっていた観あり。但し、今回ばかりは、遺憾乍ら、自分

の作品に対してさほど愛着感が湧いて来なかった。頭痛がする。笑い過ぎたためにのどが乾いた。マリアが一人で感激していた。

25 October

イスラエル戦は国連軍出動（大国不参加という条件下）をみることに依って一段落。議会では、インピーチメントの声未だに疎い。

頭痛がする。サルマグンダ・クラブの申込書郵送。午後三時頃起床。現在午前五時、静閑。少々冷える。ブラウン氏宛に手紙を書くつもりで起き上がってきたが、気が乗らないので、二ヶ月分の日記を付ける。ロブスターの”手入れ”をする。

26 October

ダニーの両親、休暇に出かける。

27 October

午後から史来訪。

近くの公園の中を一寸歩く。紅葉。晴。

28 October

曇。雨。史帰宅。

ダニーの両親帰宅。

29 October

午後五時まで床の中に居る。憂鬱。頭痛気味。

ブラウン氏に手紙を書かねばならない、と思うと僅かにブラウン氏が厭わしく思われて来る。教養紳士、俗物根性。首のつけ根が痛む。クレイグに手紙を書こうと思う。イスラエル前戦、静寂に戻った様子。雨。寒い。

30 October

デヴィドとオーデュボン・アーティスト宛に手紙を書く。雨。陰気。午後二時起床。

31 October

何是「暴力」が非人間的なものとして解釈されねばならないのか。「暴力」も又、人間たるものにとっては価値のひとつである。暴力とは勃力の訓練を受けていない「未開」のままの在り得る形のままの姿であり、であるからこそ際限のない可能性を貯蔵しているものである。反社会的な暴力とは、暴力の全形から社会的勃力の形を切り取った後に残された暴力の姿である。だからこそ、「芸術力」は社会的な暴力をも内包する必要

があるのである。「芸術力」とは云ってしまえば価値判断を受ける以前の無垢な「暴力」が発するエネルギーの総景なのである。ハロウィン。晴。

2 November 1973

晴。午後から市に寄り、史を連れて、ダニーと計三人でニューヨーク上州の湖畔。山中にあるスタンプルックという牧場スタイルの休暇地へ出かける。散り残った紅葉が美しい。到着したのは午後五時頃。市から約三時間、車でかかる。

形態に変化のある湖と森と林とがあり、建物の前部には、馬屋と牧場とがあり、場所は良い。文字通り、牧場休暇に”必要”なものは全部、一応揃えてあるという状態。ピンポンを少々し、夕食。鶏のロースト。子供（四ツ子のうちの三人）と同席する破目となったためダニーが不機嫌となる。卓上に鱸を並べた一同は皆自意識の処理に困っているような様子。夜中の十二時頃、屋内プールで一泳ぎして就寝。夜中、風が出、寒い。

3 November 1973

晴。風少々。

十時頃起床。十一時半から乗馬の稽古に出かける。馬の顔が何とも云えず愛らしく見える。静かな、諦らめたような、当惑も多少しているような、善良そうな眼だ。最初の馬は素直な馬で（鈍い乳色の馬）一寸した操作だけで馬を乗りまわすことが出来た。”良い嫁”とはこんな馬のような女のことを云うのだろう。

可愛い馬である。昼食はロースト・ビーフ。陽ざしが明るい。食後、”乗馬時間”が来るまでの間、湖畔へ出かけて写真を撮る。湖の色は木光色で、凄いような感じがしたが、さん橋や、岸に伏せてあるボートの色（黄色、青）や、ベンチ等々が周囲にあるせいで、冬の恐ろしさや湖水目線の物凄さが枯れた避易地の軽い背景にすり換えられていた。午後からの馬は、最初の馬は勝手に馬屋へ帰って行き、二番目の馬は、老いて肥えた巨大な馬で、諦観と侮辱感を背中一面に示し乍らのたりのたりとふてくされて歩いていただけだった。

バレー・ボールをし、夕食（ポーク・チョップ）後、史とダニーが泳ぐのを見、十一時近く、ホールへ出かけて、ブラデー・マリーとダンス少々。午前三時就寝。

4 November 1973

晴。風あり。午前十一時起床。昼食（ステーキ）後、二時から始まる乗馬に出かけたが遅刻したために馬にありつけず一時間ほど風の中で吹き漂され乍ら立ち続ける。昨夜、夕食卓上で一緒だった男が白いトックリセーターに白の乗馬ズボン、濃かつ色の乗馬靴には赤い色の鞭をさし、白い帽子まで被るという大仰な舞台姿で、英国スタイルのくりに衿って居り、一人だけなみはずれているのを意識しているためにややこわばった不機嫌そうな顔をし乍ら、それでも演じかけた芝居は立派にやり遂げる決意を持って勇ましく乗りこなしていた。

彼氏の奥さんは鼻の変化した貴族的な高慢さがかなりある生意気そうなユダヤ人系の女で、偉そうに鼻声で喋る。馬も、女も、彼氏の趣味（或いはパッション）の具現化らしい。昨夜、乗馬が目的だけで、ここへ来ていることを強張っていた理由が解る。つまりプロローグをつけ足す必要があった訳だ。”ここ”は安価で”下品”で大衆的な場所柄であるために。私の馬は、老いぼれて居り、仕方なく、困り果て乍らよぼよぼと歩く。可哀そうに。四時過ぎ、皆と挨拶をして、出発。朝鮮レストランで夕食をして、史を送り、帰る。

5 November 1973

曇。午後二時起床。漫然としている。”休暇”もそろそろ終りにせねばなるまい。

END